

猿投神社

猿投神社は、遠い昔から神の宿る山として崇められてきた標高 629m の猿投山の大部分を占める広大な境内を持つ古代の聖地である。猿投山の南麓にある本宮と、山腹にある東宮、西宮からなる。

古くは 9 世紀に記録されており、927 年に完成した「延喜式」にも記載されている。13 世紀以降、歴代支配者の保護を受け、学問や商売、宗教の中心地として栄えた。この時代の日本の宗教は神道と仏教が複雑に絡み合ったもので、猿投神社には多くの堂宇や僧坊が存在していた。三河国（現在の愛知県の東半分）の三宮に指定されていたため、新任の国人領主が就任後に義務づけられた国巡礼の際に、三番目に参拝する神社だった。

しかし、江戸時代（1603～1867）になると、有力な支援者がいなくなったこともあり、猿投神社は衰退していった。1853 年（嘉永 6 年）の火災で社殿の大半を失い、1868 年の明治維新の後、お堂や仏像などの破壊につながった神仏分離令が出されると、難を逃れたや火災の後に再建された仏教の建物は 1 棟を除いてすべて取り壊された。残った「山中観音堂」は本殿の北側にある。現在の社殿は、1856 年から 1965 年にかけて建てられたもので、一番奥の本殿へと続く参道に一直線に並んでいる。

猿投神社では、木製の絵馬に願い事を書いて、神様に奉納することができる。絵馬には、主祭神である大碓命にちなんで、左手の鎌が描かれている。神話ではヤマトタケルの双子の兄である大碓だが、双子の片方は必ず右利き、もう片方は左利きで生まれると信じられていたことから、左利き用の鎌は、荒れ地を熱心に開拓したとされる大碓を象徴するものとなった。